

# 竜の専属紅茶師

オルイン

ルウルウ達の母親。

ヤシュム

ルウルウ達の父親。

レグルス

ルウルウの兄。  
魔力が高く天才肌だが、  
とっても気まぐれ。

ルウルウ

魔法を勉強中の少女。  
とある勘違いで  
マリカを召喚してしまう。

悠人

マリカの元恋人。

セルファ

魔導術統率協会の魔元帥。  
常に無表情で、マリカに  
冷たく厳しい態度を取る。  
実は人間ではないようで……？

マリカ

紅茶をこよなく愛している。  
彼氏に酷いフラれ方をした日、  
茶葉のまず〜異世界に  
トリップしてしまう。

キューちゃん

羽根トカゲの子供。  
マリカとセルファが  
面倒を見ている。

登場人物  
紹介

プロローグ 私が紅茶の美味しさを追求する理由

あれは十五歳の頃――

受験で第一志望だった高校に落ちた私、辻茉莉花は、泣くことも悔しがることもできなかった。ただ何をやる気にもなれず、部屋にこもり、ベッドの縁に背中を預けてボンヤリとしていた。生まれてはじめての大きな挫折に、当時の私は耐えきれなかったのだ。

そんな私を見兼ねて、隣の家に住む幼馴染のお姉ちゃんがつけてくれた物。

それは、お盆に載った、美味しそうなお菓子に、ティーコゼーを被せたティーポットだった。

お姉ちゃんはティーコゼーを外して、白くて丸い陶器を持ち上げた。そして、温められたカップに注がれたのは、深い琥珀色に輝く液体。

笑顔で差し出されたカップを戸惑いながらも受け取ると、やわらかい香りが私を包んだ。

その香りに引き寄せられ、カップに口をつける。渋みなんてない、どこまでも優しい味。次の瞬間、胸に充満していたモヤモヤが、涙に変わってポタポタと落ちていった。

この時の小さな感動は、挫折によって失われかけていた私の感情を呼び戻してくれた。

何か特別な出来事があると、人は嬉しくなったり感動したりするけれど――

何気ない日常の中にも、ささやかな幸せや感動がある。人が生きていく上で、実はそんな小さなぬくもりがとても大事なんだと知った。

以来、紅茶は私の平凡な日常に幸せや感動をくれるアイテムになった。

そして私は、周囲の人達もささやかな幸せを感じる事ができるように、心を込めて紅茶をふるまうのだ。

## 第一章 どうやら私が浮気相手らしいです

「もう！ 最低だ！ さいつてい！ 信じられない！」

日が傾いて闇に染まりつつある街中で、私は泣き喚きながら探し物をしていた。周りの目なんて気にしてられない。

「貴重な、アッサムの紅茶缶をぶん投げるなんて！」

あの女、許せない！ ううん、一番許せないのは悠人だ！

事の起こりは、十数分前。

生まれてはじめてできた彼氏——悠人に、二股をかけられていたことが判明した。しかも、私が浮気相手だったらしい。さらにさらに、本命の彼女にストーカー扱いをされて、大事な紅茶缶を窓から投げ捨てられてしまった。

そして現在、私は髪を振り乱しながら、転がっていった紅茶缶を探している。

必死に紅茶缶を探す姿は、きつとドン引きものだろう。

血走った目を地面に向け、呪いの言葉を吐き続けているのだ。そんな女が近くにいたら、皆逃げだすと思う。

ただど今の私は尋常じゃない心理状態にあるのだ。

藤井悠人は、私が働いている紅茶専門喫茶『アンバー』にやってきたお客さんだった。

紅茶を上手くいれられた時、私が思わずやってしまうポーズ『ハート』。両手の人差し指と親指を合わせて、ハート型を作るのだ。

それを見た悠人が、

「可愛いことするんだね」

と、話しかけてきたのがきっかけ。

それから一気に親しくなり、お付き合いをはじめて四ヶ月……

甘い顔立ちの彼はとても優しく、笑うと少し幼く見える。その可愛らしい笑顔で、私の話をいつも真剣に聞いてくれた。

紅茶のインストラクターの資格を取り、「一日三回は紅茶を飲まないと干からびちゃう！」と断言し、茶葉の産地にまで留学しちゃうほど紅茶ラブな私。周囲の男性達には「ついていけない」と呆れられ、お付き合いの対象になったことは一度もなかった。

だけど悠人は、紅茶一筋を通り越して紅茶馬鹿な私に、誰よりも理解があった。将来は茶園を持ち、自分の紅茶ブランドを作りたい！なんて夢物語だって、馬鹿にしないで楽しそうに聞いてくれた。

嬉しかった。格好良くて優しく、私のことを応援してくれる悠人に、紅茶と同じくらい夢中になった。——なのに。

(よりによって、どうして今日こんな惨事が……！)

「彼氏と二人で飲んだら？」とマスターから貰ったアッサムの紅茶缶を探しつつ、私は今日を振り返る。

本日十一月一日は、『紅茶の日』。

一七九一年の十一月一日、大黒屋光太夫は、当時のロシアの女帝エカテリーナ二世のお茶会に招かれ、日本人ではじめて本格的な紅茶を飲んだ。その逸話をもととなり定められたのが『紅茶の日』というわけ。

この日にイベントを行う紅茶専門店は多くて、私の勤める『アンバー』でも特製のロシアンティー・セットを提供していた。土曜日だったこともあり、お店は行列ができるほどの盛況ぶり。夕方になって、客足はようやく落ち着いていた。

あと一時間もしたら閉店だと一息ついていると、マスターから「おいで」と手招きされた。そしてキッチンで渡されたのは、高級ブランドの茶葉の缶。

「ティーウィズミルクには最適な茶葉だよ。今日はもう上がっているから、早く彼に美味しい紅茶をいれてあげな」

「いいんですか？」

「いつも頑張ってる茉莉花ちゃんにご褒美！うちの看板娘によやく彼氏ができたんだ。逃げられないように、しっかり彼の心を掴んどかななくちゃな！」

く〜！ マスター、いい人だ！ ……看板娘だなんて、ちよつと買いかぶりすぎな気もするけど。

マスターは紅茶缶だけじゃなく、お店で出しているスコーンまで分けてくれた。

お言葉に甘えていつもより早く上がった私は、悠人のアパートに向かう途中、高級食材が売っているストアーに寄って牛乳を物色した。マスターが言っていたティーウイズミルクっていうのは、いわゆるミルクティーのこと。濃厚と謳っている牛乳と、低温殺菌処理をした牛乳とで悩んだけど、低温殺菌のほうを選んだ。

それからチーズとハム、卵ときゅうりも買い物かごに入れる。これで二種類のサンドイッチを作るつもり。店長から買ったスコーンも、一緒に出そう。

リュックを背負った私は買い物袋を左手に、紅茶缶とスコーンの入った紙袋を右手に抱え、スキップしながら彼のアパートに向かった。

——その時の私は、悠人からしつこく言われていた言葉を忘れていた。『うちに来る時には連絡をくれ』という言葉を。

悠人の住むアパートに辿り着き、彼の部屋を見上げる。考えてみたら、今日は土曜日。サラリーマンの彼は仕事が休みだから、不在の可能性だってある。

しかし彼の部屋に明かりがついているのを確認し、ほっと胸を撫で下ろした。

(私、土日はいつも仕事で遅いから、悠人も驚くだろうな)

接客業をしていると、大抵土日は休めない。だから悠人と会うのはいつも平日で、彼の仕事が終わった後だった。

そういえば、土曜に会うのははじめてだ。スーツ以外の格好をした悠人は、どんな感じだろう？

私はドキドキしながら、彼の部屋の前に立つ。買い物袋と紙袋をなんとか片手に持った時、バランスを少し崩してドアノブに手をかけてしまった。そのままかちやりとドアが開く。

鍵をかけてないなんて不用心だなあ。危ないよって言つとかないと。

そんなことを考えつつ、私は部屋に入った。

——そこには、珈琲片手に見知らぬ女の人とじゃれ合ってる悠人の姿。

その後は、もう修羅場。悠人が私の存在を誤魔化しがっているのは明らかだった。

「こんな奴、知らない」「実は、俺が帰宅する時間を見計らって、いつもつきまとわれていた」「紅茶いれたら帰るからってしつこくて、一度だけ仕方なく部屋に上げた」……

はじめは気まぎれな表情をしていた悠人だけど、どんどん拗ねた表情になり、そんな言葉を重ねていった。そして最終的に——

「俺は本当は珈琲派なんだ！ 毎回しつこく家に立ち寄って！ 迷惑なんだよ！」

「やだ！ ストーカー？ 貴女、最低ね！」

見知らぬ女の人の罵倒を聞いて、私は啞然とする。

「俺達、付き合わない？」って言ったのは悠人だよな？

珈琲派？ 今日、はじめて聞いたよ？

「紅茶……美味しいって……」

聞きたいことは山程あるのに、情けなくもそんなことしか聞けなかった。生まれてはじめての修羅場というやつに、すっかり気が動転していたのだ。

女の人は怒りを露わにして、私の買い物袋を奪って床に叩きつけた。グシャ、と卵の割れる音を聞きながら、こちらを睨みつけている彼女を見つめる。綺麗な顔が台無しだなあ、なんて間抜けな感想が浮かんだ。

だって、本当に綺麗な人なんだもの。スリリとした身体つきだけど胸はふっくら盛り上がっていて、艶のある髪が肩に流れている。私とは違って、胸のサイズも髪質も最上級クラス。服や小物もどこかのブランドじゃないかな。なんだかお嬢様って感じだ。

「私と悠人はね、来年結婚するの。こ・ん・や・くしてるの！ これ以上つきまとうなら、警察呼ぶわよ！」

—— 婚約？ 聞いてない。婚約者がいるなんて、聞いてないよ。

悠人に目を向けるものの、彼は膨れっ面で視線を逸らしたまま。

私に対して、何か怒っているようにも見える。

……婚約者がいたから、事前に連絡をくれてあんなにしつこく言っていたのか。

思わずぼんやりしていると、悠人の婚約者は私が手にしていた紙袋を奪う。そしてマスターに貰った紅茶缶を取り出し、

「こんなもの！」

と、部屋の窓から外へぶん投げてしまった！

「キヤアアアアアアアア！」

大事な紅茶缶を投げられて、私はようやく我に返る。

ふん！ と鼻息荒く笑う婚約者と、その後ろに隠れるように立つ悠人に向かって叫んだ。

「紅茶に罪はないでしょ！ 悠人から付き合おうって言ってきたくせに！ ふざけるな！」

私の言葉に、婚約者の女性は「えっ？」と悠人に向き直る——その瞬間、私は彼の顔をグーで殴った。

不意打ちを食らった悠人は、テレビにぶつかって倒れる。ガタンと大きな音がしたけど、どうせこの後、婚約者に介抱してもらおうのだろう。

私は身を翻し、悠人の部屋を出た。

彼の部屋を飛び出した私は、紅茶缶が落ちたと思われる場所をしらみつぶしに探した。とめどなく目から流れ落ちる汗を拭いつつ——

泣いてなんかいないからね！ これは走ってかいた汗だからね！

心の中で強がりながら、私は屈んで地面に目を走らせる。

「生まれてはじめて付き合った彼と、こんな修羅場……初心者にはハードル高いよお……」  
来年、結婚するって言った。私はそれまでの遊びだったんだ。

『茉莉花のいれた紅茶は美味いね』って褒めてくれたのも、すべて嘘。

「珈琲派だったなんて……早く言ってよ、馬鹿！」

だったらお付き合いOKしなかったのに！ 私は、付き合いなら紅茶派の彼がいいの！  
 なんとか悠人への想いを振り切ろうとするけど、簡単にはできない。拗ねたような彼の態度と冷たい視線を思い出すと、どうにかなってしまいそうだ。

——もう私は紅茶さえあればいい！ 紅茶一筋に生きる！ どこか遠くに行って、紅茶に囲まれて生きてやる！

そう心に誓った時、視界の端に紅茶缶が映った。それは道行く人に蹴られて、カラカラと音を立てながら転がっていく。缶の転がる先は、交通量の多い道路。いつの間にか日は暮れていて、ヘッドライトを点けた車がひっきりなしに走っている。

「紅茶！」

私はガードレールを乗り越えて、車が途切れるのを待つ。紅茶缶は道路の真ん中で小さく弧を描きながら回転し、再び転がり出した。

「——あ！」

弾かれたように飛び出した私は、缶を拾い上げた。次の瞬間、急ブレーキの音が響き、ヘッドライトの眩い光に身体が包まれる。足が竦んでその場から動けないまま、私は紅茶の缶をしっかりと握りしめて目を瞑った……

——ああ、轢かれたな、と思いながら。

## 第二章 あやかしと間違えられて召喚されました

身体が……身体が重力に従って落ちていく。

車に撥ねられて、宙を飛んでるのかな？

——でも、ぶつかった衝撃や痛みはない。それに、下降時間がえらく長い。ゴオオオオ……と、激しく風を切る音は、空耳じゃないみたい。バタバタバタ！ とやかましくはたまっているのは、私のスカートのように——

「……まさかね……？」

目を瞑っていた私は、意を決して瞼を開けた。

飛び込んできた景色は、清々しい青空。

——そして、かなりの標高から自分が落下していることに気がつく。

「ギヤアアアアアアアアアアアア！」

本日二度目の、絶叫。その絶叫ぶりの可愛くないこと……

「どうしてどうして——！！」

確か私がいた場所は、悠人のアパートから程近い道路だったはず。それに、日はすっかり暮れていた。



状況を呑み込めず、ただジタバタと手足を動かす。でもどうにもならず、私は落下し続けた。その間、私の身体は上下にひっくり返ったり、風でグラグラ揺れたり、不安定なままだ。

パニックに陥りながら、私は紅茶缶を両手で握りしめて、ひたすら叫び声を上げる。

死ぬの？ 死んじゃうの？ 私……

このまま地上に落ちたら確実に死ぬ。痛いかな？ 痛いだろうな。

せめて即死だったらいいよね。ううん、先に気絶するかも。

短かったな、私の人生。二十二年と六ヶ月……再び瞑った目から涙が溢れた。

——もし生まれ変わるなら、茶園のオーナーの子供になって、紅茶飲み放題の人生を送れますように……

覚悟を決めたその時、下から吹き上げる風に身体がフワッと浮いた。

「……えっ？」

今まで落下し続けていた身体は、宙で一度止まる。

おそろおそろ目を開けた私が見たものは——

「文字……？」

記号に似た蒼く光る文字の羅列が、紐のように私の身体を取り囲んでいる。その文字列は、クルクルと私を軸に回っていた。

やがて私の身体は再び下降しはじめ、地上目指してゆっくりと落ちていった。

足下からどよめきが聞こえる。どうやら大勢の人がいるようだ。

私、助かった？

次の瞬間、私はボスンと誰かの腕の中に落ちた。そのぬくもりにほっとし、身体の力が抜けてしまふ。呆けたまま受け止めてくれた相手を見て、私は驚愕した。

（うわー、めちゃくちゃ美形……）

目の前にいたのは、一人の男性。その美形っぷりに、私もボウツとしてしまふ。

中東系のエキゾチックな顔立ちだけど、そこまで濃くはない。輪郭は滑らかで、薄すぎず厚すぎない理想的な形の唇。鼻筋もスツと通り、影ができていて。ああ、鼻が高いんだなあ、羨ましい。

艶やかな黒髪はどうやら硬めらしい。わずかに顔を動かした時の前髪の動きでわかった。

そして何より私の目を引いたのは、長めの前髪から覗く瞳の色。その鮮やかな琥珀色に、私はすっかり魅入ってしまった。

「ファーストフラッシュみたいの色……」

ファーストフラッシュっていうのは、北インドの周辺で春摘みされた茶葉のこと。カップに注いだ紅茶は、彼の瞳のように綺麗な色をしているんだ。

思わずまじまじと彼を見つめた私だけど、一方の彼もじっと私を見つめている。

というか、こうもはっきり瞳の色がわかるのは、顔の距離が近いってことで……

「近い……！ 顔、ちかっ！」

キスマで数センチほどしかないことに改めて気づき、私は慌てて彼の腕から下りた。

彼はカッチリした黒ずくめの服を身に纏まとっていて、胸を覆うマントまで真っ黒だ。私は、まず彼に頭を下げた。

「助けてくださって、ありがとうございます！」

先程まで私を取り囲むように回っていた蒼い文字は、いつの間にか消えている。

なんとなく、彼が助けてくれたのかと思った。事実、私の身体を受け止めてくれたのはこの人だ。一方の彼は、無表情のまま私を見つめている。

(……なんだか、怖い)

こんな美形に見つめられて困っちゃう！ 恋に落ちる予感？

——なんて、胸が踊る展開ではないらしい。美形の彼が、眉間に皺しわを寄せて険げんしい表情を浮かべたからだ。さらに、眉尻を吊り上げて怒りを露あらわわにした。

ギョッと後ろに下がった私を無視して、彼は隣に立っていた高校生くらいの女の子に怒鳴り出した。

「☆\*%¥∞●」

青銀色の髪をベリーショートにしたその女の子は、彼の態度にすっかり萎縮しじゆくしたらしい。半泣きになつて震えながら、口を開いた。

「△\$@%#f!」

……言葉がさっぱり理解できないんですけど。

困惑した私は、紅茶缶を持ったまま、思い切つて二人の間に入った。

「あの！ その！ すみません！ 一体何がなんだか……！ これって、どういうことですか……!？」

二人は私に目を向けた後、顔を見合わせる。

そして男性がこちらに近づき、何かを口ずさみながら人差し指を私の額に当てた。その指先から、ポワンと温かい物が流れてくる。それは、あつという間に全身に伝わって消えた。すると美形の彼は手を下ろして、再び口を開く。

「大変失礼しました。普通の人だというのに、こんな乱暴な召喚方法を取つてしまいました。愚弟ぐでい子にかわつてお詫わびします」

うわあ……美形はお顔だけじゃなくて、声も美しいんだ。男の色気が溢あふれるバリトンボイス。こんな男の人、本当に存在するんだね。

思わずポーツとしてしまった私だけど、すぐに我に返る。

「あ、あれ？ ……言葉、理解できる！ さっきまでわからなかったのに！」

「言語を理解して意志疎通ができるよう、貴女あなたに『魔法』をかけました」

——魔法？

「……今、魔法って言いませんでしたか？」

「ええ。こちらの言語を自動的に翻訳し、貴女にも意味が通じるようにしました。逆に貴女の言語も自動的に翻訳され、我々の耳に届いています。もつとも翻訳なので、時には意味が少し違う言葉に変換されることもあります」

淡淡と喋る全身黒ずくめの彼は、どうもこの説明をするのに慣れてるように見えた。

一方の私は、やはり状況がわからず頭を抱え込んだ。その拍子に、手にしていた紅茶缶が頭に当たって、カン！ と高い音が響く。

「い、痛い……」

頭に響く痛みは、これが夢ではないことを証明している。痛む頭を押さえながら周囲を見渡すと、緊迫した表情の若い男女達が、じつとこちらを見ていた。

（全員、変わった服を着ているわ……）

黒ずくめの彼とベリーショートの子を含め、見慣れない格好をしている。まるでファンタジーの作品に出てきそうだ。

そういえば、アニメ好きな姉がはまっていたキャラクターの服装とよく似ている。とある学園に通うキャラクター達は、近未来的な学生服や軍服を身に纏っていた。

「あ！ もしかして、コスプレのイベント中ですか？」

「コスプレ？」

黒ずくめの彼が首を傾げた。

「コスプレっていうのはですね、人気のアニメとか漫画のキャラクターと同じ服装をして、そのキャラになりきる遊びでして……」

「遊び？ 遊びではありません。これは我々の普段着ですし、今は実習試験の真っ最中でした」

「実習？」

私が首を傾げると、黒ずくめの彼が「そうです」と答える。

「貴女は、我々にとつての異世界から召喚されました。そしてここは、ウイリセリアと呼ばれる世界にある、『シヤリアン』という専門機関。我々は、異世界からあやかしを召喚する試験を実施していたところです」

私は目を剥いた。

「あやかしい!? あやかしくて、あれですよね？ いわゆる『妖怪』！」

「貴女の世界の言葉では、多分そうです」

悪びれもせず、彼はあっさりと答えた。

——妖怪に間違えられて、異世界に召喚？

何それ？ 本当？ そんな酷い顔ですか？ 私？

頭がクラクラしてきた。私の常識的な頭は、今の状況にまったくついていけない。

悠人の二股発覚からいろいろありすぎて、頭がオーバーヒートしてるみたい。

「ごめんなさい！」

その時、ずっと項垂れていたベリーショートの子が目の前に来て、腰を折った。

「あやかしを探して、私、透視してなんです。そしたら、お姉さんが髪を振り乱してフラフラ彷徨っているのを見て！ 気配を探ったところ、あやかしの存在を感じたし、お姉さんも他の世界で生きたいと希望してたし……それに、おっかない物体が光りながらお姉さんに迫っていたから、危ないと思って……！」

確かに髪を振り乱しながら紅茶缶を探していました。現実逃避もしていました。光る物体というのは多分、車でしよう。

——でも、と私は呻く。

「あやかしの存在を感じたって……私、普通の人間なんですけど……」  
「恐らく、本物のあやかしも貴女の近くに潜んでいたのでしょう」

黒ずくめの彼は、そう言った。

そのあやかしだって、そもそも私の世界では空想上の生き物だ。だけど彼らが当たり前のように話すので、本当に存在しているのかと、ますます混乱する。

「……もう、どこから突っ込んだらいいのか……」

くらくらと目眩がする。私は昔から健康児で寝込むこともあまりなかったけど、物事に熱中しすぎると寝食を忘れて、立ち眩みでふらふらしてしまう。今、まさにその症状が出ていた。

そういえば、今日はまだ夕食を取っていない。それに、次々と起こる出来事にもついていけないし——

「……駄目……も……う」

グラリと視界が揺れる。薄れていく意識の中、驚くベリーショートの子と、私の腕を掴んだ黒ずくめの彼が目に入った。そこで、私の瞼は完全に落ちた——

\* \* \*

私、どうしたんだっけ？

徐々に覚醒する意識。

どうやらベッドに横になってるみたいだ。いつもより掛け布団がフンワリしてるけど、きつと気のせいだよ。

それにしても忙しい夢を見たなあ。悠人にストーカー扱いされて、婚約者だという女の人に紅茶缶を投げ捨てられた上に車に轢かれそうになって……その後、あやかに間違えられて異世界に召喚されてしまった。

たとえ夢でも妖怪呼ばわりされるなんて、とショックで思わず落ち込む。

「はあ……疲れる夢だった」

コロンと寝返りを打ちながら呟く。まだ疲れているみたい。もう一眠りしようかな、とまどろんでいると、自然と瞼が落ちてくる。

——ん？ 目の前にイケメン。

肌は薄めの褐色で、真っ直ぐでサラサラな青銀の髪から覗く瞳はターコイズブルー。ほどよい厚みの唇が弧を描いて、こちらを見つめていた。

（うわぁ、夢で見たイケメンとは違った美形……）

もしかして、これも夢なのかな。

（どちらかといえば、こちらの彼より、先程見た落ち着いた感じの黒髪の彼のほうが好みだけど）

濁りのないファーストフラッシュ色の瞳。あんなに澄んだ瞳は、はじめて見た。そんなことを考えつつぼんやりしていると、目の前の青年が口を開く。

「君？ 起きてる？」

夢にしては明瞭な声に、一気に目が覚めた。どうやら夢じゃなかったみたい。「——わっ！ わっ！ わっ！ わわわわわー！」

私は跳ね起きて枕を抱え、ヘッドボードに背中をぴたりとつける。

「えっ？ ここどこ？ 貴方、どなた？」

改めて、自分が寝ていたベッドや室内を確認する。

今まで眠っていたベッドはクイーンサイズで、天蓋のついた立派な造り。部屋も私が暮らしている実家の六畳間とは雲泥の差で、写真でしか見たことがない、中世ヨーロッパの貴族の部屋のように豪華絢爛だった。

そして、こちらを覗き込んでいる青銀の髪の彼も、少々変わった服を着ている。

青を基調とした袖口の広いショートジャケットに、白のハイネック。ズボンもジャケットと同じ青色で、飾りのないシンプルなものだが、ロングベストの裾や合わせにはエンブレムに似た刺繍が施されている。頭には幅広のカチューシャをつけて、後ろ髪が邪魔にならないようにしているみたい。

彼は驚いた表情で私を見つめていたけれど、ふいに片腕を軽く上げた。すると、どこからかフワリとシヨールが飛んできて、蝶が止まるように彼の手におさまった。……手品？

彼は、ぽかんと口を開けている私の肩に、そのシヨールをかけてくれた。

「驚かしてごめん。これでも何回か普通に起こしてみたんだけど、なかなか起きてくれなかったから……お目覚めのキスを」

「——したの!？」

「しようとしたら目が覚めた」

ほう、と安心して、抱きしめていた枕を下ろした。だけど、まだ顔が熱い。

「そこまで安堵されると、傷つくなあ。慣れてないの？ お目覚めのキス」

残念そうに眉尻を下げる彼の憂い顔が、妙に色っぽくてドキドキする。くうう、男なのに色気が！

「いや、その、日本人はそういう挨拶は慣れていなくて……」

「君は『日本人』という人種なんだ？ 君の世界には、どのくらいの人種がいるの？」

彼の問いかけに、私はハッとす。やっぱり、夢じゃなかったのだ——異世界に来てしまったことは。そして、悠人のことも……

視線を落として黙り込んだ私の肩に、彼は優しく手を置いた。

「昨日、僕の妹が、手違いで君を召喚してしまったと聞いて……妹にかわって謝るよ、ごめん」

「妹さん？ ベリーショートの女の子？」

「うん、そう。妹の魔力はバランスが悪くて、魔法に集中しづらいらしい。最近は調子が良かったそうなんだけど……その分、本人は落ち込んでる」

「そうですか……」

頷いてみるものの、彼の言葉があまり頭に入ってこない。だって魔力とか魔法とか言われても、私の世界では空想上の物だし……

その時、何か弾力のある物が頭に当たった。

(……えっ、あれ?)

私、彼の胸の中にいる? い、いつの間に! いくら私がショックでボンヤリしているからって、この人、女性の扱いに慣れてない?

「だ、大丈夫、大丈夫ですから!」

「遠慮しないで。こういう時には、誰かの胸を借りて泣くのが一番いい!」

いやいや、こういうシチュエーションに慣れてないのよ、私!

悠人の時も、恥ずかしさが先に立って、なかなかベタベタできなかったし!

離れようとするものの、彼は私の身体を離さない。さらに、優しい言葉がたくさん落ちてくる。

ベッドの上でこの展開は、まずい気が……危険すぎるし、胸が破裂どころか爆発しそう。

誰か! と心の中で叫んでいたら、バタン! と、扉の開く音が聞こえた。

「兄さま! 何勝手に部屋に入ってるの!」

彼の腕が緩んだすきに、私はサツと身体を離す。

ズカズカと足を踏み鳴らしてやってきたのは、あのベリーショートの子だ。

青銀の髪はペロツと舌を出して、悪戯っ子のような表情を浮かべた。まるで可愛い少年みた

いで、どうも憎めない。大人びているけど、もしかしたら私より年下なのかもしれない。

「女性の部屋にノックもしないで入るなんて、非常識だよ!」

「さすがにそんな紳士らしからぬことはしないよ。ただ、何度叩いても応答がなかったから心配になってね」

囁みつかんばかりに怒る妹に、彼は「ごめん」と謝りつつ後退していく。

ここは助太刀すべきなのかな?

彼が部屋にいて驚いたものの、確かに私は熟睡していたし、ノックの音が聞こえなかっただけかもしれない。なんてたって、ベッドから扉までの距離が長い。聞こえなくて当然じゃないかな?

「あの、私、ぐっすり寝ていたみたいで、聞こえなかったみたいなんです。だからお兄さんのこと、そんなに責めないであげてください」

女の子は、私の言葉を聞いて目を真ん丸くする。そして大袈裟に溜息をつき、じろりと青年を一瞥して言った。

「庇わなくていいんだよ。我が兄ながら、すつつつごい女だったらしなんだから。すきを見せたら、あつという間に食われちゃうよ?」

「……あのね……実の兄を危険人物扱い?」

「危険人物は即回収です!」

女の子は、青年の背中を押して部屋から追い出そうとする。

「はいはい……」

なんだかんだで素直に従う青年の様子がおかしくて、私はつい「あはははっ」と笑ってしまった。すると二人は立ち止まり、安堵した表情でこちらを見つめる。

もしかして、気遣ってくれていたのかな？ だとしたら申し訳ないなあ。

ベリーショートの彼女は、昨日、すごい勢いで謝ってくれた。わざと召喚したわけじゃないのだと、わかっている。

「ご心配をかけしてしまつて、すみません。一晚寝て、大分落ち着きました」

私はベッドから下りて、改めて挨拶をした。

「辻茉莉花と言います」

すると、ベリーショートの子がチョココンと頭を下げる。

「私、ルウルウ・アドミナルと言います。ルウルウと呼んでください。貴女がこの世界にいる間は、私が案内とお世話をさせていただきます。よろしくお願いします」

「僕はレグルス・アドミナル」

青年は、そう言つて右手を差し出してきた。私は親愛を込めて、彼の手を握る。

「レグルスさん、ですね。よろしくお願いします」

「ツジ、つて呼べばいい？」

彼の質問に、私は首を振つた。

「——あつ、いえ、ツジは苗字でして……私がいた国では、苗字の次に名前を言うんです。私のことはマリカと読んでください」

「マリカね。可愛い名前だね。よろしく」

レグルスさんのターコイズブルーの瞳が、綺麗な三日月を描く。なんて破壊力のある微笑みなんだろう。悠人の笑顔が一番素敵！ と思つていたけど、レグルスさんと比べたら、足下にも及ばないどころか地下に潜るわあ……

「そういえば兄さま、何しに来たの？」

見惚れている私をよそに、ルウルウは胡散臭そうに尋ねた。

レグルスさんは、「そっだ」と口を開く。

「母上と父上が、マリカにお詫びと説明をしたいそうさ。食事を一緒にどうかと」

「お二人のご両親が？」

私は思わず声を上げてしまった。

この部屋からして、かなりの富裕層だと想像がつく。二人の服装も、良い素材を使ったものだと一目でわかるし……私みたいな庶民がお会いしていいのかな？

表情が強張ってしまったせいかわ、レグルスさんは苦笑いしながら言った。

「そんなに怖い人達じゃないよ。確かに母上は、この世界の魔法を司る組織を統べる人だけど。

それ以外は、いたって普通」

「そうなんです………かあ！」

レグルスさんの話を聞いていた私は、彼の言葉の意味を理解した瞬間、奇天烈な声を出してしまふ。

「組織を統べる？ ってことはすごく偉い人なんじゃないですか!? 女王様じゃ……!」

「女王」みたいな立場だけど、厳密には『魔承師』って言うんだ。今、マリカがいるこのシャリアンは国じゃないからね。女王はいないよ」

そういえば昨日、黒ずくめの人が『機関』がどうか言っていた。

「魔法組織の中核……みたいな場所、ですか？」

「そんなところ。一つの大きな組織だね」

レグルスさんは、私の問いかけに頷く。

中枢組織の頂点に立つ人！ ってシャリアンの統治者だよな？

そんな母親を『普通』呼ばわりするなんて……普通の意味の次元が違いすぎ！

「まあ、それは追々説明するとして。それより支度をしたほうがいいかな。外で待ってるから」

レグルスさんにそう言われ、改めて自分の姿を見る。

ブラウスにジャケット、サーキュラススカートを身につけていたはずの私。だけど、膝下までのゆったりしたネグリジエに変わっている！ しかも、ちよつと透けてるし……だから、レグルスさんは私にシヨールをかけたんだ！

私はエロいネグリジエ姿の自分に絶叫した。

私を色っぽいネグリジエに着替えさせたのは、ルウルウと彼女の母親——つまり魔承師様だという。昨日、完全に気を失ってしまった私を、ルウルウ一人では着替えさせられなかった。そこで、

私の様子を見に来た魔承師様にも着替えを手伝ってもらったみたい。

「マリカの服、洗濯しちゃったからこれ着てね」

ルウルウから渡された服を見て、ホッとした。それは、詰め襟のシンプルなワンピース。

……だけど着てみたら、襟下の胸元が逆三角形にカットされていて結構恥ずかしい。

「あの……胸元が開いてない服ってある？」

「その形、今流行りなんだよ。マリカ、よく似合ってるのに、なんで？」

こういうデザインは、もつと胸に盛り上がりがある人向けだと思っ。標準サイズな胸の私には向いていない。

……標準だからね！ 足りないわけじゃないから！

「ひとまず、今、用意できるのはそれしかないの」

ごめんなさい、と彼女に謝られてしまった。

「ちよつと着慣れなくて恥ずかしいだけだから……慣れれば大丈夫」

私は、ニコリとルウルウに笑いかける。我儘を言って困らせたいわけじゃない。

すると、ルウルウも安心したように笑返してくれた。その笑顔は本当に嬉しそう。喜怒哀楽がハッキリしてる子っついていいな。

ルウルウは表情が豊かで可愛いと思う。私には歳の離れた弟がいるんだけど、妹もいいなあ。あ、もちろん、弟も可愛いけどね。

「明日、一緒に服を選ぼうね。数着持っていないと不便だもん」



ルウルウは嬉しそうに言った。さすが女の子。ファッションに興味があるんだろうな。ついで紅茶関係ばかりにお金を使ってしまう私だけど、たまに友達と買い物へ行くとウキウキする。明日が楽しみだな。

「そうだ。マリカの荷物、ベッドのサイドボードの上にまとめておいたよ。確認して？」

ルウルウが指差したサイドボードの上には、私の布製のリュックと紅茶缶が置かれていた。

リュックを開けて中身を確認する。ポーチに財布、ハンカチ、ティッシュ、水筒。それに定期入れ――

「スマホがない。長方形の薄っぺらい板みたいな物を見なかった？」

ルウルウに尋ねると、すぐに答えが返ってきた。

「それなら、危険物かどうか確認するために、少しだけ預かるって聞いてるよ」

そうなんだ。まあ、爆発したりすることはないだろうし、危険物判定はされなと思うけど。

次に、紅茶缶を手にとってみる。少々へこみがあったものの、中身に問題はないでしょ。

その時、ルウルウがヒョコリとこちらを覗き込んだ。

「それ、すごく大事な物？」

「そうね。私にとつては」

そう答えると、やっぱり、とルウルウが頷く。

「氣を失ったマリカを部屋に運んでいく間、しっかりと握っていて、なかなか離さなかったんだよ」

「あはははは」

私は笑って誤魔化した。この世界に紅茶があるかどうかわからないし、大事に飲まないよ。

「この缶……セルファも気になってみたいなんだ」

「セルファ？」

「空から落ちてきたマリカを、受け止めた人だよ。私に、魔法を教えてください」

「黒髪で全身黒づくめの人？」

「うん」と頷くルウルウを見ながら、私は改めて、すべて夢じゃないんだと思った。

\* \* \*

ファンタジー映画に登場するような、大理石を敷き詰めた床。赤い絨毯が真っ直ぐ伸びた先の台座に、豪華なドレスを着た女王様、もとい魔導師様が威厳たつぷりに鎮座している――そんな光景を想像していたけど、実際はまったく違った。

案内されたのは、とても広い空中庭園。薔薇に似た花園と、柔らかな芝の上に設置された白のテーブルセット。そこに、二人の人物が腰かけていた。

私達の姿が見えたのだろう。その二人――男性と女性は椅子から立ち上がり、笑顔で迎えてくれる。

（ふ……おおおおお……！ きつつっれい！）

私は女性のほうを見て、心の中で雄叫びを上げる。

雪のように白い肌と、花弁にも似た桃色の艶やかな唇、ターコイズブルーの瞳。後ろに結び上げた青銀の髪には飾り紐が編み込まれている。脇に少し残した髪が揺れると、日差しが反射してキラ光った。身体のラインに沿ったロングワンピースは、スラリとした体躯によく似合う。胸元がダイヤ型にカットされたデザインは、ふつくらした盛り上がり方をより美しく見せて……その時、思わず自分の胸元を眺めて溜息をついてしまった。

この女性が、レグルスさんとルウルウの母親であり、『魔承師』と呼ばれる偉いお方みたい。(若い！ 本当に二人の子を産んだとは思えない！)

あと、魔承師様を見ていると、すごく穏やかな気持ちになるのはなんでだろう？

地位の高い人に会ったら、きつと落ち着いてなんかいられないと思っただけに意外。

私は、魔承師様の隣に視線を移す。そこに立っているのは、黒髪に薄い褐色の肌を持つ中年の男性。顔は彫りが深く、波打つ髪を後ろに撫でつけ襟足で縛っている。中東系の雰囲気がある、エキゾチックなおじ様だ。彼は細い目をさらに細めて、優しい微笑みを浮かべる。

さりげなく二人を観察していると、魔承師様が口を開いた。

「はじめまして、異界の人。私はオルイン・アドミナルと言います」

「は、はじめまして、魔承師様。マリカ・ツジ、と言います」

気さくに握手を求められて、私は胸を撫で下ろしながら手を差し出す。魔承師様は、こちらがホツとするような優しい笑顔を向けてくれた。

「よろしく、マリカ。僕はヤシュム・アドミナル。レグルスとルウルウの父親だ」

「よろしくお願いたします」

私は、温厚な雰囲気のお父様とも握手を交わす。

「……？」

お父様の手を握った瞬間、ギュッと強く握り返されて、私は思わず彼を見つめた。彼は細い目を見開いてこちらを見ている。だけどすぐに優しい笑顔を浮かべ、手を離してくれた。

私の手のひらに、どこかおかしなところがあつたかな？

自分の手のひらを眺めてみるけど、わからない。

首を傾げたものの、「マリカ、どうぞ」とレグルスさんが椅子を引いてくれたので、私はお礼を言っただけ。今は、深く考えないことにしよう。

「まず、マリカ。ルウルウの親として、誤って貴女を召喚してしまったことをお詫びいたします」

魔承師様とお父様が頭を下げると、レグルスさんとルウルウも一緒に頭を下げる。私は、大いに慌てふためいた。

「い、いえ……！ あやかしに間違えられたのはショックでしたが、ルウルウさんが召還してくれなかったら私、大怪我をするどころか死んでいたかもしれませぬ。逆に助けてもらっただけです。感謝しています！ だから頭を上げてください！」

「そう言ってもらえるとありがたいわ……」

魔承師様はゆるりとした動作で頭を上げ、優しく説明してくれた。

この世界——ウィリセリアは、魔晶石という魔石から生まれたらしい。そして魔承師様のご先祖

様も、伝承によると魔晶石から生まれたとのこと。

ウィリセリアの民は皆、世界を創った魔晶石の恩恵を受け、大小の差はあれど魔力を持っている。魔力が高く強力な魔法を扱える者は、魔法の使い手として、専門機関シャリアンに所属する。そして各国から魔法に関する様々な依頼を受け、派遣されていくそう。

シャリアンは機関ながらも国のような体制を取っていて、その領土には多くの魔法の使い手達が住んでいる。

遠い過去、魔法の使い手達は『力試し』『修行』と言って自ら異世界に出向いたり、様々な『人』や『物』を召喚したりしていたという。そのためウィリセリアには、多種多様な人種、動植物が存在する。

「しかし、この世界ではもちろん、どこだって、『人』と呼ばれる者は社会の一員として規律のもと生きています。そんな『人』をいきなり、なんの承諾もなしに召喚してしまうのは、いいことではないでしょう？」

と、魔承師様。確かに、誘拐たぐいの類にあたるかも……それとも神隠し？

私がいいた世界だと、きつと失踪事件として警察が動くよね。……私、大丈夫かな？ 行方不明者届とか出されちゃったりしてない？

でもルウルウの落ち込みっぷりを見て、そんな不安を口に出せなかった。

魔承師様は、穏やかな口調で続ける。

「そこで、むやみな召喚を禁止し、シャリアンを運営する魔導術統率協会の管理下でしか召喚を行

わないと決めたのです」

「召喚そのものを禁止しようとはしなかったんですか？ 召喚した動物や植物がすべて安全な物とは限りませんし」

「ええ、マリカの言う通りよ。それは凶悪な動物かもしれないし、有害な毒素を持つ植物かもしれない。そんな懸念けんねんもあって、一時はすべての召喚を禁止したの。『人に限らず、あらゆる動物、植物、物の召喚を禁ず』と。でも禁止すると、それに逆らう者が必ず出てくる。隠れて召喚する者が続出してね……だから、シャリアンの監督のもとで行えるようにしたのよ」

魔承師様はそこまで話すと、瞳を潤うるませてうつつむいているルウルウの頭を引き寄せた。誰も責めていないわ、と言うように。

「今回、娘は生まれてはじめて召還を行ってね……。手順としては、まず召喚する相手を透視して、精神感応テレパシで『こちらに来ないか？』と問いかけ、承諾を得てから連れてくるのが最良なんだ。けれど、貴女あなたが危険あなざらに晒さらされていると思って、娘は焦あせってしまったそうだ」

ヤシユムさんが、魔承師様のかわりに説明してくれる。

それで、人かあやかしか判断のつかないまま、私をこちらの世界に召喚したというわけですね。

まさか透視と精神感応まで使えるなんて。魔力すごい。

「なるべく早く元の世界に戻してあげたいけれど……なかなかそれも難しく、今日、明日というわけにはいかないの」

「そうなんですか……」

魔承師様の言葉を聞いて、私はさすがに肩を落とす。

「ごめんなさい、本当に。透視していた時、『どこか遠くに行って、紅茶に囲まれて生きてやる!』って心の声が聞こえたから、てっきりマリカの声だと思っちゃったの。あれは、人の姿をして生活している、あやかさんの声だったんだね」

ルウルウが、鼻をすすりながら謝罪した。

心の声まで聞こえるんだ……すすぎる。

「あの、その心の声は、間違いなく私です」

「……えええっ?」

私が正直に言うのと、この場にいた皆様が素っ頓狂な声を上げた。

そしてしばらくの沈黙の後、何か考え込んでいた魔承師様が小首を傾げて口を開く。

「ちょっと待っててね。今、精神感応でセルフアをこの場に呼びました。ちょっと事情が変わったから、もう一度当時の状況を確認しつつ考えましょう」

私が心の中で叫んだ言葉に、何か問題があるのかな……? 確かにあの時、自暴自棄になつたし……と不安が押し寄せる。

一方で、ファーストフラッシュを連想させる綺麗な瞳の彼——セルフアさんとまた会えることに、ちよつとワクワクしている自分もいた。

程なくして、セルフアさんがやってきた。昨日と少々デザインの違う黒い服を着て堂々としてい

る姿は、魔承師様より偉そう。黒い翼のようなオーラをまとい、まるでラスボスみたいに見えるのは何故だろうか?

めちやくちゃ不機嫌だと一目でわかります……一気にワクワク感が萎みました。

「事情が変わったと聞きました——どういうことでしょうか?」

魅惑的なボイスだけど、明らかに怒りが含まれている。

こちらを見下ろす彼は、無表情だ。しかし、瞳には疑心の光が宿っているように見えた。ついでうか、改めてよく見ると、セルフアさんは三百眼なんですね? ……目つきが悪くて怖いです。

「まさか彼女が『あやかし』だったとか? しかし、彼女は明らかに『人』ですよね?」

「ええ、もちろんです」

セルフアさんと魔承師様のやりとりに、私はホツとした。

良かった。誰の目から見ても、私は人として認識されている。

「では、なんだと言うのです? 業務が溜まっているので、お話があるなら、お早くお願いします」

彼は苛立った様子でそう言い、椅子に座る気配もない。するとヤシユムさんが、穏やかに諭した。

「いいからお座り。今日は、後でレグルスを大いにこき使っていていいから」

えっ!? セルフアさんって、魔承師様の息子さんのレグルスさんより偉いの?

思わずセルフアさんをじろじろ見ていたら、彼はこちらをちらりと見ておざなりに頭を下げた。

「セルフア・トウバンと申します」

「マリカ・ツジと言います」

とりあえず椅子から立ち上がり、私も自己紹介をする。

そんな私達を見ていた魔承師様は、少しだけ硬い声で言った。

「彼女、願ったらしいわ。『遠くへ行きたい』と」

「——えっ？」

セルファさんは、わずかに目を見開く。どうやら驚いているらしい。

その後、私は皆様にこの世界に召喚される前の出来事を詳しく話さなければならなくなり、涙目で語ったのだった。

「……やけになっていた私は、『もう私は紅茶さえあればいい！ 紅茶一筋に生きる！ どこか遠くに行つて、紅茶に囲まれて生きてやる！』と泣きながら心の中で絶叫したわけです。そうしたら、次の瞬間には空の上で絶叫する羽目になって……」

ああ……昨日、今日会った人に、何が悲しくて失恋話をしなくちゃならないのでしょうか？

その失恋も、考えてみたら昨日の話。想定外のことが起こりすぎて、振られたことに悲しむ暇すらなかった。

落ち着いて経緯を説明する中で、次第に自分の感情がはつきりしてくる。私が本命でなかったことへの悲しみ、悠人にストーカー扱いされて本命の彼女に罵詈雑言を浴びせられた怒り……そういったものがごちゃ混ぜになって、鬱陶しく心に渦を巻いているのがわかった。

思わずはあ、と溜息をつくと、皆さんも一緒に溜息をついた。ただ一人、セルファさんを除いて。

「マリカ、と言いましたね」

セルファさんが低い声で話しかけてくる。それがどうも怒りを抑えているように聞こえて、私は内心びびりながら「はい」と返事をして彼と向き合う。

「召喚の実習をする際、召喚者は注意しなければならないことがあります。『相手の意思を確認せず召喚してはならない』ということです。とはいえ『人』の多くは、召喚前に意思を問う時点でパニックを起こしてしまいます。異世界の『人』には、他にも世界がたくさんあるという認識がないのかもしれない。まあ、鈍感な生物なのでしょうね」

今、侮蔑的な言い方をされたような……ムツとしたけど、まだ話は続くようなので黙って聞くことにする。

「そのため、我々が主に召喚するのは『人』以外の者。『あやかし』がその代表です。『あやかし』の中には、長い時を経て、『人』と同じ姿で『人』と変わらない生活をしている者がいます。そのような異端な存在を探し、他の世界に住んでもいいと考えている者を見つけることも修行の一環なのです」

「私のいた世界にも、あるいは他の世界にも、そんなあやかしさんが大勢いるということですか？」  
「ええ。しかし『人』でも、本人が心の底から強く望んでいれば、ウイリセリアに召喚していいことになっているのです。ウイリセリアは、あらゆる物を受け入れる世界ですから」

皆さんは当初、召喚を望んでいない『人』を間違つて呼び寄せてしまったと考えていた。でも私

の話聞いて、そうではないと判明した。だから魔承師様は『事情が変わった』と言って、状況確認をするためにセルフアさんと呼んだね。

「そうか……そういうことだったんですね。『どこか遠くへ行きたい』と強く望んだ時、ルウルウさんが私を見つけて、そこにたまたま、あやかさんもいた」

私の言葉に、セルフアさんが頷く。

「ウィリセリアは、貴女のその希望に応えることが可能です。マリカ、貴女は自分のいた世界に戻らず、ここに定住したいという気持ちをお持ちですか？」

そう尋ねられて、私は申し訳なく思いつつ目を伏せた。

「あの時は、紅茶さえあればいい、どこか違う世界に行きたい、と思っていました。でも、少し落ち着いた今は……自分のいた世界を捨てることなんて考えられません。家族や友人、大切な職場を忘れて、こちらに定住するなんて……」

そう言っつてうつぶくと、セルフアさんのほうから舌打ちが聞こえた。顔を上げれば、面倒だと言わんばかりに顎に手をあてて、考え込んでいるセルフアさん。

うわあ……この人、顔は良いけど、なんていうか……

一方のレグルスさんは、私の手を握って慰めてくれた。

「失恋して『どこか遠くに行きたい』と思うのは仕方のないことさ。誰でもそう思うよ」

ありがたい！ レグルスさん！ 失恋したこと、なさそうだけど。

「失恋したことないくせに、何知ったかぶってるんです」

あ、やっぱり……。セルフアさんの苛立つた突っ込みを聞いて、私は納得する。

彼はその勢いに乗って、鬱憤を吐き出すように喋り出した。

「最近こういう事柄が多くて非常に腹立たしい。恋に破れたら『どこか違う世界に行きたい』『消えてしまいたい』と悲劇のヒロインになるのが流行っているのですか？ 今にも死にそうな顔をして必死に訴えるから召喚してみれば、来たと勝手にパニックを起こして『元の世界に戻して！』と泣き喚く。これで何件目になります？」

セルフアさんのカリカリぶりに、

「すいません……その時は本当にそう思ったんです」

と、謝るしかない私。召喚された後にも、泣き喚いてはないけれど、パニックを起こして気絶したり。確かに大迷惑だったよね。

「その度に事後処理をするこちらのこと、考えてほしいものです。召喚者は腕の未熟な者が多いから、すぐに帰すことができない。とはいえ他者が帰すと精神にダメージを与えるので、それも無理。結果、私が召喚された者の世界に向き関係者の記憶操作をして、しばらくこちらに住む手配までしなくてはならない。中にはパニックを起こして人の話を聞かない者もいるから、カウンセラーの手配までしなくてはならないのです」

「そんなこと、私に言われても……」

そう言った瞬間、セルフアさんの三白眼が私を射抜く。瞬時に身体が凍った。三白眼怖い！ 知り合っつて間もない人に容赦なく睨まれて、心まで凍てつきそうだ。

「特に今回はルウルウを叱らなくてよかった案件だったのに、酷く叱ってしまった。ルウルウは間違つて召喚したわけじゃなかったというのに。……指南役である自分自身に対しても腹立たしい」  
ああ、それもあつて、こんなに苛々してるんだ。

「セルファ、私はなんとも思つてないよ。あの状況じゃ仕方ないし。それに私の腕だと、マリカをすぐ元の世界に戻せないのは変わりないもの。だから、それ以上怒らないで」

ルウルウがそう言うのと、魔承師様も口を開く。

「セルファ、マリカは今まで召喚された『人』に比べたら大分落ち着いています。貴方がそこまで奔走する必要はないと思いますよ」

「大丈夫だよ、セルファ。そうだ！ 食事はまだだろう？ 我々もなんだ。一緒に取ろう」

「セルファの好きな紅茶もあるよ」

ヤシユムさんやレグルスさんまでも、セルファさんの機嫌を直そうと必死だ。彼が機嫌を損ねると、何かあるんだろうか。

……あれ？ 紅茶？ 今、紅茶つて言わなかった？

「紅茶つて、この世界にもあるんですか？」

期待に震える胸を押さえて、なるべく自然に尋ねる。だつて騒ぐと怒鳴られそうだから、セルファさんに。

「ああ。どの国でも普通に売ってるよ」

ヤシユムさんがそう教えてくれた。もう嬉しくて、ブルブルと身体が震える。

「よかつたあ！ 私、一日に紅茶三杯は飲まないと落ち着かないんです！」

「じゃあ、そろそろ禁断症状が出る頃だね」

軽やかな笑いが起きた時、一人の女の人が現れた。ワゴンで食事を運んできてくれたみたい。

サンドイッチにスコーン、ケーキ——馴染みのある物に加えて、ピンクやブルーなど色鮮やかな菓子、変わった形の果物。様々な食べ物が、テーブルに所狭しと並べられていく。

いい匂いがして、お腹がキュウ、と鳴りそうだ。私は、慌ててお腹を押さえる。

そういうえば、こつちの世界に来てから、食べ物はおろか水さえ口にしていない。そもそも紅茶を一日以上飲んでいないなんて、信じられないわ。

真つ白なエプロンを着けた給仕の女性は、一人ひとりのカップに茜色の飲み物を丁寧に注いでいく。香りからして紅茶に間違いないと思うけれど、随分色が濃い。異世界の紅茶なんて、普通は飲む機会がないよね。召喚されたことに、感謝！

「マリカ。これから貴女が帰るまでの間、ルウルウが『案内人』としてお話をします。何かわからないことがあつたら、ルウルウか、魔法の使い手達をまとめているセルファに聞いてちょうだい。もちろん、わたくしやヤシユムも相談に乗るわ」

魔承師様から、そんな優しいお言葉をかけてもらう。

「僕もいるからね」

魔承師様に続いて、レグルスさんも微笑んでくれた。

「はい。しばらくご厄介をおかけします」



私が素直に頭を下げると、セルファさん以外から優しい笑顔が返ってきた。

紅茶好きだという彼は、静かにカップを口に運ぶ。先程までの怒気は、嘘のように消えていた。

——さて！ 私もさっそく！ と、一口。

(……あれ？)

思わず、カップの中の波紋をジッと見つめる。

「どうかした？ マリカ」

ルウルウは首を傾げながらも、スコーンを取り分けられる。

「ううん、変わった味だなあって」

私は、彼女からスコーンの載った小皿を受け取りつつ答えた。

「マリカの世界の紅茶とは味が違うのかな？」

「でも、美味しいですよ」

私はニコリと笑って答え、茜色の紅茶を飲んだ。

……本当は、あまり美味しくなかった。だけど、そんなこと言えるはずもなく、私はテーブルに並んだ珍しい食べ物について尋ねながら、異世界の食事を楽しんだ。

ふと、ルウルウの隣に座るセルファさんが目に入る。

彼は紅茶を一口飲んで、そっと息を吐いた。無表情なのでよくわからないけど、溜息みたい。

……あまり迷惑がかからないようにしなきゃ。いつも笑顔を絶やさずにね。笑顔は、人間関係を上手く築くための潤滑油だもの。



「マリカを元の世界に戻すために、修業をやり直します！ 三ヶ月後には、必ずベストな状態に持っていきますから！ それまで我慢してね、マリカ！」

異世界初の食事の後、ルウルウは力のこもった宣言をしてくれた。私も力強く頷く。

なんでも召喚した側とされた側の間には、『縁』という目に見えない繋がりができるらしい。その『縁』によって、私は現在ウイリセリアに滞在できているんだって。だから『縁』が薄くならないよう、なるべく彼女と一緒にいることが大事なんだそうだ。『縁』が薄くなる、もしくはなくなるとどうなるか……怖くて聞けませんでした、はい。

ちなみに、私みたいにいざ自分の世界に帰る人は、『預かり人』と呼ばれるんだとか。

ウイリセリアについて、親切に教えてくれる皆さん方に、私は、他にも気になったことを色々聞いてみた。

まず、どうしてルウルウ以外の人は私を元の世界に戻せないのか。

先程セルファさんは、「他者が帰すと精神にダメージを与える」と言っていた。これは、私とルウルウの間に『縁』ができたから。召喚の際、私達の精神の一部がまざりあって、『縁』ができたのだという。要するに、私の中にルウルウの精神がまざり、ルウルウの中にも私の精神がまざって

いる状態。そんな状態で第三者が私を元の世界に戻そうとすると、上手く精神を切り離せず、大変なことになるんだって。

「自分を見失ったまま一生を過ごしたいなら、私が貴女を元の世界へ戻しますが？」

淡々と提案してくるセルファさんが怖い。三ヶ月くらい待ちますよ！ ふん！

「ルウルウ、しっかりと精進なさい。ウイリセリアは、意思を持つ世界。三ヶ月は、我慢のきくギリギリの期間です」

「うん、わかってる」

セルファさんの忠告に、ルウルウは神妙な表情で頷く。どういう意味かわからず首を傾げたけれど、それについては教えてもらえなかった。

『縁』が切れちゃうってこと？ ……怖い。

とはいえ、この『縁』。ウイリセリアで暮らす分には、とっても便利な物みたい。

召喚された後、この世界の住人となれば、恩恵を受けられて、多かれ少なかれ魔力を得られるらしい。そしてもし魔法を使えるようになると、『縁』を利用して精神感応も使えるのだとか。

「じゃあ今も、ルウルウからなら精神感応で私に連絡が取れるんですか？」

「うん、できるけど……マリカは魔力がないから、連絡しても一方通行でしょ。遮断してるよ」と、ルウルウ。

「魔法が使える者同士は、合意の上で、ほんの少し互いの精神をませることができると。そうすれば精神感応が可能になるんだ。大体、家族間が多いね。あとは友人や恋人同士とか」

レグルスさんの説明に、私はなるほど、と頷いた。そうそう、セルファさんは、魔導術統率協会の魔元帥まげんすいという地位にある人なんだって。さて、ここで疑問。魔元帥まげんすいって何をするの？

答えは、シャリアンに所属する魔法の使い手達の管理・監督をする人。

シャリアンは力のある魔法の使い手達によって作られた専門機関で、魔導術統率協会が運営している。魔法の使い手は、魔力の高さや魔法の得手不得手によって、魔法使い、召喚師しょうかんし、魔導師に分けられる。

シャリアンには、国外から魔法に関する様々な依頼があるらしい。その依頼の内容に合わせて、セルファさんは魔法の使い手達を各国に派遣しているそうだ。

そして、セルファさんの上にいるのが魔承師様であるオルイン様。じゃあ、レグルスさんは？

「僕は、母とセルファの仕事の補佐だね」

彼は、優雅に果物をつまみながら答えた。

「いつもサボって女の子と遊んでるの。それで大抵、セルファに回収されるんだよ」  
ルウルウがこっそり耳打ちしてくれる。

うん！ レグルスさんの甘い言葉には気をつけよう。

とはいえ、今後はレグルスさんよりセルファさんと顔を合わせる機会が多くなりそう。

セルファさんは、ルウルウに魔法を指南しているんだって。

ルウルウは小さい頃、感情の起伏が激しくて、魔力をうまくコントロールできなかったらしい。

さらに、さすがは魔承師様のお子様というべきか……魔力を最大まで放出した場合、それを制御できるとは限られてしまう。そんなわけで、セルファさんが指南役に名乗りを上げたみたい。

面倒事には首を突っ込まない性格に思えたけど、意外と面倒見がいいのかな？

先程、セルファさんに舌打ちされてビビっていた私は、少しだけ彼を見直した。でもやっぱり怖いし、お近づきにはなりたくない。

本当はあまり顔を合わせたくないけど、ルウルウはセルファさんといることが多い。そんな彼女と『縁』が薄れないように一緒にいなければならない私。必然的に、セルファさんとも顔を合わせなくちゃいけないという悲劇。

（お顔といい、お姿といい、惚れ惚れするほど格好いいんだけどね……）

性格に難有りだとイケメン度が下がるよね。私は、こっそり溜息ためいきをついたのだった。

「三ヶ月か……」

部屋に戻った私は、この世界に持ってきた紅茶缶の蓋ふたを開けた。中の包装はまだ開封していない。「一ヶ月もたないだろうなあ……一日一回にして、茶葉の量も減らせば……」

再び溜息。こちらの世界で飲んだ紅茶は、正直言って美味おいしくなかった。渋味と苦味が喧嘩している感じ。ずっと茶葉をポットに入れっぱなしにしていたのかな？

でも、皆さんは当たり前のように飲んでいた。

「異世界の茶葉は、私がいた世界にあった品種とは違うのかも」